

「感謝」から「行動」へ—— 野球やボランティア活動を通じて、 まちの力になりたい

——震災当日の様子を振り返ってください。

阿部 寮の部屋で寝ていましたが、地面から突き上げるような衝撃を受けて目覚めました。激しい揺れを感じましたが、寝ぼけていたので何が起きているのかわかりません。二段ベッドの上段から見下ろすと、一面に物が散乱していました。下段の寮生に「大丈夫か」と声をかけて無事を確認し、一緒に廊下に出ました。



阿部 柁希さん

見渡すと、ありとあらゆる物が倒れていて、地震の大きさを実感しました。みんな、怪我はなく、寮生34人全員無事でした。監督から「自宅に避難するように」と指示を受け、舎監から安否報告と同時に、迎えに来てもらえるよう家族に連絡をして

迎えてもらえよう家族に連絡をして

もらいました。

鬼海 私は管理者として寮にいました。いつもとは違うことが起こったとすぐわかるほど激しい揺れでした。寮の1階に寝ていましたが、ただ事ではないと感じて、寮生がいる2階や3階の様子を確認に行きました。散らばった物を踏んで怪我をしないように靴を履かせて、全員を1階に集めました。この時の一番の心配は津波でした。幸いにも「津波の心配はありません」と聞いてほっとしたことを鮮明に覚えて



鬼海 将一さん

ます。そして激しい揺れの約20分後、急に暗闇に包まれました。停電になりましたが、津波が来る恐れがなかったため、明るくなる

波が来る恐れがなかったため、明るくなる

応しているとは様々な情報も集まります。ふ

だん練習をしている高校のグラウンドにも大きな被害があつて防球ネットがすべて倒壊し、町内のいたる所で家屋が倒壊していることを聞き、震災のすごさを痛感しました。その後、町内施設の復旧が進み、地域の住民やOBなど多くの方々のご協力を得て、寮の片付けや清掃を行ったおかげで寮も再開させることができ、学校の再開も決まりました。

——地震から1週間後の9月14日に秋季北海道大会の地区予選がありましたね。

鬼海 「こんな時に野球をやっているのか」という葛藤はありましたが、秋の大会は春の甲子園選抜の出場をかけた重要な大会であり、これを目指して毎日頑張ってきたので、ぜひ出場させてあげたいと思いました。この気持ちをくみ取ってくれた多くの方々からの支援があり、出場することができたので、前向きな気持ちに切り替えました。大会運営側にも考慮いただき、日程を2日延期してもらい、試合に向けて2日間練習できる時間をいただきました。練習時間は1日2時間と限られていましたが、や



震災から約1年後に開催された2019年夏の全道大会

北海道鶴川高等学校野球部
監督(むかわ町職員) 鬼海将一さん
主将 阿部柁希さん

まで動かずに1階に集めた部員らと共に夜が明けのを待ちました。明るくなって周りを見渡すと、寮の玄関ドアのガラスは割れ、食堂では米や食器が散乱。外に出ると、敷地は陥没していました。

停電で食事の用意すらできない状況となり、寮生活が困難になることはわかりましたので、その日のうちに保護者に連絡を取り、実家に避難させることを決めました。信号が消え、ガソリン確保も大変な中でしたが、家族に迎えに来てもらい、無事に全生徒を一時帰宅させることができました。

寮生を送り出したあと、私と舎監だけの数人で片付けられる状態でもありませんでしたから、そのままにして、野球部監督としてではなく、今度は町職員の立場として避難所の対応に向かいました。避難所対策

は大事ですが、自分たちが全力でプレイすることで少しでも町が元気になれば、という気持ちでした。

鬼海 部員にはふだん通りにプレイすることを伝えていましたが、私自身、町がこのような状態で「さあ、試合だ」と頭を切り替えることは難しかったですね。それが負けた原因ではありませんが、部員の気持ちもふだん通りではなかったと思います。

阿部 試合は震災の1週間後でした。野球をやれる状況ではないのに、町の方々の応援を受けて野球をやらせてもらったことを本当に感謝しています。

鬼海 町の方々は野球部をわが子のように応援してください。心強い最強のサポーターです。子どもたちがこのような環境で野球ができる町は、全国でもむかわ町だけだと思います。いつも感謝の気持ちでいっぱいです。

——大会終了後にボランティアを始めていますね。

阿部 試合が終わってから当時のキャプテンと「自分たちがやれることはないか」と話をしました。「今度は僕たちが町の方々



様々なボランティア活動を行う野球部員（左：被災農家の復旧作業 右：被災店舗の清掃）



野球部伝統の「三気精神」を掲げた仮設生徒寮

の力になろう」と、ボランティアに参加することを決めました。
鬼海 このボランティアは、部員の自発的行動であり、私は町職員として災害復旧に関わっていましたが、人手が必要な場所を聞いて彼らに紹介しました。

ボランティアを申し出ると、あちこちから声がかかりました。荷物運搬、片付け、

ポスティング、清掃活動、さらには農家のお手伝い、そのほかシシャモ祭りなど町のイベントのお手伝いなど、ありとあらゆることをさせていただきました。

——大会が終わってからのこれまでの生活はどうでしたか？

阿部 しばらく寮に住んでいましたが、調査で建物が半壊状態だということがわかり、11月半ばに二宮地区の報徳館（旧小学校、現生涯学習センター）にみんなで移りました。被災して半壊となった寮を出て、いつもと違う環境での生活でしたが、それほど不安はありませんでした。

農家の皆さんから米や野菜などを差し入れてもらうなど、地域の人たちの温かさを感じました。

鬼海 寮母さんは報徳館の狭い厨房でも、これまでと同じように食事を作ってくれました。いつもとは違う環境になりましたが、みんなで食べ慣れた寮母さんのご飯を食べると、かつての寮生活に戻ったような気持ちになりました。これは大きかったですね。

被災した年の冬には仮設寮の完成を迎

——指導者として胆振東部地震の経験から得られたことはありますか？

鬼海 部員は野球を通して、そしてボランティアを通して、たくさんの人と出会いました。町の方々は自分たちも被災し、厳しい状況なのに、彼らに「頑張って」と温かい声援を送ってくれました。ボランティアに行けば「ありがとう」と素直に感謝の気持ちを表してくれます。そうしたことが子どもたちの心を動かし、彼らの自発性を促し、彼らを大きく成長させました。ありがとうと言われれば言われるほど、子どもたちの心はどんどん豊かになっていくものだと気づきました。二度と経験したくない出来事ですが、震災を経験したからこそ理解できたことですし、失ったものばかりではないと思えました。

——最後に支援してくれた方々へメッセージをお願いします。

阿部 震災を通してたくさんの人に支えていただいたことを、心から感謝しています。この経験を活かし、人のために役立つ人になっていきたいと思えます。

鬼海 部員たちの成長のために多くの皆さま

え、冬休みを活用して12月末に持ち物だけを運び込んで、年が明けた15日の始業式に合わせて報徳館から仮設寮に移りました。そして、野球部伝統の言葉を仮設寮に再び掲げました。「元気・本気・一気」です。大きな声であいさつする「元気」、全力疾走の「本気」、一気呵成の「一気」。これまでの野球部が掲げてきた信念を貫き、三気精神で様々なことに取り組みました。

——ボランティアを経験して、どのようなことが得られましたか？

阿部 本当に全国から支援の言葉や物資をいただきました。「感謝の気持ちは行動で示すしかない」と思っただけです。困っている人がいれば、その人の助けになろう。その精神をボランティアを通じて学びました。このことは、僕にとっても、チームとしても大きな学びだったと思います。

鬼海 自分たちをサポートしてくれる皆さんの人たちの姿を目の当たりにしたからこそ、彼らは「町のため」「支援してくれた人たちのため」と心から言えるんです。本当に大切なことを学んだと思います。

んからご支援をいただき、ありがとうございます。彼らは震災の経験を活かし、どこかで困っている人がいれば、その人のために手を差し伸べることができる大人になってくれると思います。これからも本校野球部への応援をどうぞよろしくお願いいたします。



約2年間を仮設生徒寮で共に過ごした野球部3年生一同